智儼教学再考

小林實玄

智儼の教学については、最近多くの研究が発表されているが、いまは彼の教学全般の基本的立場について再考し、彼の教学の綜合的な理解の基礎的な問題を考えたいと思う。

即ち、智儼の『華厳経』の解釈、及びそこに論じようとする彼の一乗の教義である「法界縁起」の説のありかた等の問題から考えようとするのであるが、しかもそれはまた、これらの説が悉く彼の行じつづけた観行を根底としているものであることも併せて論じたいと思うのである。

一

はじめに、『華厳経』一経の解釈について、殊に一経の標段解釈の立場に関して注意したいと思うのであるが、これはまさしく智儼の観行の立場にもとずくものであり、所謂中国華厳宗における解釈の源となっているものである。

即ち、智儼の一経の標段解釈とは、

序　分　「世間浄眼品」

正宗分　「盧舎那品」以下

流通分　無し、又は終末の二偈

の三分において、正宗分中に三段を分つのであり、それを

挙果勧楽生信分

修因契果生解分

依縁修行成徳分

と標するのである。もっともこの分段の説は智正にすでにあったと伝える所もあるが、その内容をしることができるのはこの『捜玄』の説である。

ところが、この標段解釈の問題に関してはまず『華厳経』一経の所説の意について叙べなければならない。

『華厳経』一経の意はまた一経編集の意図とも関連するものであるが、『華厳経』とは釈尊の「始成正覚」に関して「如来の出現」を説くことを主とするものであるといえよう。従って、一経の中心となるところは当然「如来の正覚」を説く「如来性起品」にある。

そして、この一品の前には天宮の諸会の諸品をおくが、これは成道を語る仏伝の説によるものであろう。これに対してこの一品の後には普光法堂会の説として一経独自の菩薩行である「普賢行」を説く「離世間品」の一品をおいている。

これらを主説とし、この一経の説法の初めとしてその普光法堂の会を説き、更にその前に一経の序説として説かれたのが「世間浄眼品」等の二品である。これに対して、一経の結説として、経の別説ともいうべき「入法界品」をおいたと解するのが一経の意であると考えられるのである。

このような一経の意について、智儼の標段解釈は彼の一経解釈の意を論じているものであるが、『搜玄』は、初会の「世間浄眼品」を序分とし、「盧舎那品」の蓮華蔵世界を説くところ及び第二普光法堂会の「如来名号品」等前三品を挙果勧楽生信分の「果」を説く分とする。またその残り三品は「因」の「信」の説とする。

そして終りの、普賢行を説く第七重普光法堂会「離世間品」と、第八会「入法界品」の二会二品は依縁修行成徳分の「行」を説く分とする。これらは経説の意をまさしく論じているものであろう。

ところが、その前後の間の天宮の四会の諸品の説をすべて修因契果生解分の「解」とするのであり、ここに智儼の一経解釈の特別の態度をみることができる。

即ち、天宮の諸会に説く十住・十行・十廻向・十地等は菩薩行を説くところである。従って、終りの二会もまた菩薩行として普賢行を説くところと合せれば『華厳経』は菩薩行を説くに終始するといえようが、この中、十住等を「解」とし、普賢行を「行」とするのである。

ところが、「如来性起品」も「解」の中の普賢行を説くとするところに、とくに智儼の態度をみることができるのである。もっとも、「解」中、十住乃至十地等の菩薩行を「方便対治修成因果」とし「普賢行・如来性起」の二品は「性起自体修顕因果」と区別するところではあるが、それにしても「如来性起品」を「解」の立場の内の菩薩行において論じているのである。

さきに一経の中心として如来の出現を説くのが「如来性起品」であるといったが、その如来の立場ではなく菩薩の菩提心の立場で論じているのである。

即ち、

性者体、起者現在心地、

等ととき、

一始終相対。二闊狭相対。

初始発心至二仏性起一、終至二大菩提大涅槃流通舎利也。

闊狭頓悟及三乗始終、出世至声聞縁覚一

世間下至二地獄等諸位一也。仍起在二大解大行大見聞心中一。

という、始終と闊狭の二種の説をもふくめて彼は菩提心について性起を論じているのである。

これは『華厳経』を菩薩行を説く経典として論ずる態度であるが、これは智儼が観行の行修を要とする立場によるものであり、ここに彼の一経解釈の立場があるとみることができよう。

そして、いま標段に示される「解」と「行」とは、「法界観」の「真空観」に説かれている「解・行」によって論じているのである。

なお、この『華厳経』解釈の立場は法順の『一乗十玄門』に説く法界縁起の果因二分の立場と相応するところであり、法順に導かれる一経解釈の立場であるともいえよう。

二

次には、『華厳経』を論ずるについて、一乗の別同二教を立場として語ることを考えることができるが、智儼は殊に一乗同教の立場において論ずるものであることを指摘することができる。

そして、この同教の立場を主とすることも勿論彼の観行を根底とするものであることはいう迄もない。いま一乗同教の根底になっている観としては「法界観」については「真実観・理事無礙観」の前二観にあるが、しかも彼は『摂大乗論』による「唯識観」を用いることが注意される。ただし、唯識観といってもこの唯識観は如来蔵のアリヤ識の唯識観である。なお『捜玄』が指示する観としては「真如観」等も説かれている。

その他智儼が記している観行についていえば、ほとんど同教の所摂とする諸観である。『華厳五十要問答』では「如来因縁義」「唯識観義」「空観義」、『雑孔目』では「梵行品初明通観章」「明法品初立五停心観章」「第九廻向初普別諸観義章」等がある。その理事諸観とは

所以於レ此釈二諸観門一為第九廻向初作二始終義一説二普賢法一故。於レ此明二但初発心入道五法一随根差別設レ観不同。所謂真如観・通・観・唯識観・空観・無相観・仏性観・如来蔵観・壁観・盲観・苦観・無常観・無我観・数息観・不染観・骨観・一切処観・八勝処観・八解脱観・一切入観等、並於二修道初門一随応施設拠レ病而言、不レ得二一定一。何以故為レ病不走故、此等観法在二於三乗小乗一分有二一乗見聞一。

等と挙げるが、全く初門入道の観門といえよう。

ともあれ、『華厳経』が説いている同教の立場は、主としてかの天宮の四会の「解」の内の方便対治の説において説かれ、十住等は始終二教の立場、十地は終教の立場で論じているといえるが、彼が主とするところは勿論十地の終教如来蔵の説である。

十地総名可是三乗熟教名故

とあるごとくである。

ところで、『華厳経』において、その天宮会の中で、もっとも重要な説は、やはり「十地品」第六地の十種の十二縁起観のところであろう。『捜玄』もまたその十二縁起には多くの論説を説いているが、その注意するところは「依止一心観」第二であり、殊にこの唯識観を詳説しているのである。智儼がここに説くこの唯識観は随って彼の一乗同教の最も主なるものとして論じているといえよう。

二依止一心観者即十二縁起等能依也。心者即梨耶心、就レ此以題レ章以二梨耶縁起一為二此観体一。……能治所依観体者還以二三空空似実無生性相一為二此順観一故、論云阿梨耶識為二大空一故。無生無願如レ論思レ之。応レ知。逆成二一観一同二初門一。

唯識者有二二種一。一梨耶識持生二諸法一離レ識即無。二明二意識唯識一。生死涅槃染浄等法現在二意地一。離レ識即無。

梨耶唯識始是解境非二行所依一、意識唯識此終、即是正解所依、心終意始、反上可レ知。

等と説かれる唯識観である。即ち、この唯識観は梨耶唯識と意識唯識との二種の唯識と説くが、この唯識はまた、

一者解唯識、二者行唯識。如二意識唯識一、初即順レ行後即順レ解。

本識唯識初即順レ解後即順レ行。

とも説く。即ち、この唯識にまた「解・行」を語り、解の唯識は梨耶唯識から意識唯識へとすすみ、行の唯識は意識唯識を始として梨耶唯識を終とするという。

観相云何。如二行心見法為一境、若無二観心覚一境、染浄等法従任現前、今知二竟言所作一、取謂五心不レ起、知二識作一時名下用二依他一遣中分別境上。

問。依他与レ識云何取レ別。答。依他約レ相所二以知一分別体定相能起レ識。其識随縁不尋レ不二自性一。此応レ成レ空乃現二似相一。故知約レ相。二唯識約レ体。三界唯心転頭分別即空故得レ知也。識望二無性一即似非レ実、体相相成、故通説耳。

智儼が『捜玄』において、この唯識観を殊の外重視することについては、この十二縁起観を論ずるそのはじめに、とくに「釈義」の一段を設けて、ここに彼の教義の要説である「法界縁起」を論じていることによって最も明らかであるといえよう。

即ち、智儼が「法界縁起」と標して説く教義はこの一段の説のみである。『一乗十玄門』が説く十玄の法界縁起は別教の説であるに対し、ここに説く彼の新しい「法界縁起」はまさしく彼の一乗同教の立場で説かれる綜合的論説であるといえよう。

三

そこで、次にはこの智儼の「法界縁起」の内容について、

所謂一乗同教の説であることを論じておきたい。

この法界縁起は浄法と染法との二門として説かれる。

釈義者、依二大経本一、法界縁起乃有二衆多。今以二要門一略摂為レ二。一約二凡夫染法一以弁二縁起一、二約二菩提浄分一以明二縁起一。

というのであるが、『一乗十玄門』の唯心廻転善成門の順逆二転の立場を承ける説であり、二門ともに如来蔵を主とする立場の説である。浄法門は菩提の浄分に約してというのであるが、一乗と三乗との二つの実践的観行を根底としてとくものであり、本有と修生との二つの立場について、それぞれ本有と本有修生、修生と修生本有との二を開き、合せて四門をもって説くのである。その四門は

言二本有一者、縁起本実体離二諸情一。法界顕然。三世不同。故性起云、衆生心中有二微塵経巻一、有二菩提大樹一、衆聖共証。人証前後不同其樹不レ分二別異一故知二本有一。又此縁生文十二因縁即第一義。言二本有修生一者、然諸浄品本無二異生一。今約二諸縁発二生新善一、拠二彼諸縁一乃是妄法、所発真智乃合二普賢一。性体本無二分別一、修智亦無二分別一。故智順レ理不レ順二諸縁一。故知、修生即従レ本有同レ性而発。故性品云、名二菩提心一為二性起一。

三修生者、信等善根先未二現前一。今対二浄教一、頼レ縁始発。故説二新生一。故論云、彼無二無分別智一故。

四修生本有者、其如来蔵性隠在二諸纏一。凡夫即迷処而不レ覚。若対二迷時一不二名為レ有。故無相論云、若有応レ見。又依摂論云、有二得不得見不見等一故也。

と説いているのであるが、この中、三乗の立場は如来蔵に入る立場、一乗の立場は法界の縁起の立場を根底として開かれている四門である。即ち、信等未現前の立場から法界顕然の立場まで、観行のすべてを根底として開く四門であり、従ってまた所立の四門は一乗別同二教のすべてを含んでいる立場である。

このことについて、

若対レ経分レ文、此十番縁生唯有二二門一、一修生、二修生本有、余二在二性起品一。

とは、「十地品」の十二縁起観の説、その唯識観の説は三乗の修生と修生本有の二門の説くところであり、一乗の説は「性起品」に説かれると指示するのである。

次に染法門であるが、これは如来蔵アリヤ識の説について説くものである。縁起一心門と依持一心門の二門を開くが、縁起一心門は染浄を分たない立場、依持一心門は能所の二に分つ立場であるという。これらの一心は如来蔵アリヤ識であるが、縁起一心門はまた三門を開き、㈠真妄縁集門は真妄和合のアリヤ識、㈡摂末従本門は唯其心作、第一義諦の立場、㈢摂本従末門は唯妄心作として種子識、果報識のアリヤ識というのである。

第二染法分別縁生者有二二義一。一縁起一心門、二依持一心門。

縁起門者大分有レ三。初真妄縁集門、二摂本従末門、三摂末従本門。

言二縁集一者総相、論十二因縁一本識作無二真妄分別一。如二論説一、依二一心法一有二二種門一、以二此二門不二相離一故。又此経云、唯心転故。又如二論説一、真妄和合名二阿梨耶一、唯真不レ生単妄不レ成、真妄和合方有二所為一。……

二摂本従末者、唯妄心作。故論云名二種子識及果報識一、……。

三摂末従本者、十二因縁唯真心作、如二波水作一亦如二夢事唯報心作一、以二真性一故……

又此経云、三界虚妄唯一心作。論釈云第一義諦故也。……

二依持一心門者、六七等識依二梨耶一成。故論云十二縁生依二梨耶識一。以二梨耶識為二通因一故。

この染法門はこのように如来蔵アリヤ識について説くものであり、唯識観について種々の立場を論じているものである。

この浄法・染法二門の立場について、あらためて考えるとき、浄法門は「法界観」によって論じているのに対し、染法門は唯識観によって論じているといえよう。

そして、一乗の別教の「法界縁起」が「周遍含容観」によって「十玄」の縁起を説くに対し、この「法界縁起」は明らかに同教の立場において法界観のすべてと及び唯識観によって論じているのである。即ち、この「法界縁起」は一乗同教の説であり、殊にそれは唯識観を重視するものとして、智儼の一乗の教義をまさしく示しているものである。

四

『華厳経』の解釈及び教義の建立に関する智儼の基本的態度について、『捜玄』における立場、即ち、観行においても教義についても一乗の同教の方便対治の立場の説を主とすることを述べたが、彼のこのような態度はその生涯を通して語られているところである。

それは、『華厳経五十要問答』や『華厳経雑孔目』の諸章においてみることができる。

いま、『捜玄』の論釈を基底として説かれる『雑孔目』の説として、まず、「性起章」をとりあげておこう

性起者明二一乗法界縁起之際、本末究竟一、離二於修造一。何以故。以二離相一故。

と、性起の基本的立場を説きつつ、

起在二大解大行一。離二分別一菩提心中名為レ起。

というのであるが、これは『捜玄』に説いた菩提心の立場をそのまま語るものであり、「起在大解大行」と「解・行」をもって語るが、「此義是一乗」という。

しかもまたつづいて

若証位在二十地一、若善巧在二十回向一、若応行即在二十行一、若応解即在二十解一、若応信在二十信終心勝進位中一、若究竟即在二仏果一。

と説いているのである。これは『捜玄』にいう「解」分の

内、三乗の行位に寄せて説くところ、即ち「位位性起」というべき説であるが、これは明らかに一乗同教の説である。

更にいま一つ「普賢章」に留意しよう。

普賢者大分有レ二。一三乗普賢、二一乗普賢。

といい、三乗の普賢とは『法華経』所説の普賢について、人・解・行を分って

初人者如三法華経乗レ象至二行者前一、是其人。

二解者如三法華経廻三帰一等即是趣二向一乗之正解一。

三行者如三法華経説二普賢品一。明二普賢品一明二普賢行一者即是。

と説くのであるが、敢て『法華経』の説を説くのも同教の立場を示すものであるといえよう。『法華経』は「廻三帰一」の経として同教の立場であるとすることは、『搜玄』に明らかである。また

一乗普賢亦有レ三。

一人謂第四十五知識、普賢者是也。

二解即普賢品六十行門各皆普遍及漸次深深深深深深深深深深等、及等二因陀羅微細事等一。

三行即離世間品十種普賢心十種普賢願行法。

と説く一乗の普賢とは、人については「入法界品」の善知識を挙げる。解については「普賢行品」、行については「離世間品」を指示するが、これらの二品がともに善賢行を説くものであっても、解と行に分つのは、『搜玄』に説かれる「修因契果生解分」と「依縁修行成徳分」の分段を承けていることは明らかであろう。

五

更に、このような智儼の論説が一乗同教の立場で説くものであることについて、その決定的な説は、別教の説である十玄縁起の標義の十門について、これをまた同教の立場で説いているところに見られる。即ち、ここではこれを「浅深・闊狭」という二種の義を用いて説くのであるが、これはまた智儼が同教の立場を論ずる場合の一つの方軌である。

智儼が一乗の立場を語る場合、性起品においては「始終相対・闊狭相対」を説き、「入法界品」では「始・闊狭」をもって説いているが、これらはみな彼が一乗を説く方軌であるといえよう。いまの「浅深・闊狭」も同様である。

その十門は、

人法・理事・義文・解行・因果

の十義を標し、これについて主として浅深を用いて語るのである。

人即仏菩薩、浅深者謂従三三悪道一人天二乗菩薩漸教頓教円教咸成仏菩薩浅深不同。闊狭亦爾。

と説かれるように、人は仏・菩薩であると説いて、しかもそこにあらゆる浅深があることを敢て論じようとするのであ

り、そのことはまさしく同教を立場とする一乗の説であるといわなければならない。

法浅深者、約位従初不退乃至究竟十地諸位見法差別皆悉不同。闊狭亦爾。

理浅深者、初世間所知真実乃至窮証法界解脱自在悉皆不同。闊狭亦爾。

事浅深者、従凡夫極一顚底迦乃至煖曜天炎無礙解脱法堂浄土之処事相不同。闊狭亦爾。

解浅深者、教有秘密顕示不同、致令生解不解等。闊狭亦爾。

行浅深者、如蒐馬等各別殊分。致令業行亦異。闊狭亦爾。

義浅深者、三乗一乗差別不同致令所詮之義浅深非一、闊狭亦爾。

文浅深者、能詮文言無言等不同故浅深非一。闊狭亦爾。

因浅深者、従其名数初六因四縁次現生引乃至二十因等最後互為因等、……深浅不同。闊狭亦爾。

果浅深者、従初等流依果士夫解脱異熟果報等、世間出世間出出世間乃至窮仏不同。闊狭亦爾。

と説いて、これら十義はみな悉く浅深、即ち初より終までというすべてを並べ挙げているのである。そして『一乗十玄門』や『華厳教分記』等の一乗別教の十義と比べるとき、この説のみが同教の立場において説かれていることは明らかであろう。

なお、『華厳経』文に関する一乗の説について依縁修行成徳分の終り二会は「行」を明すのであるが、それは勿論一乗の行法である。『雑孔目』に

離世間下二会之文一乗行法。以レ始標レ終説故教義俱一乗。

という。

『捜玄』はこの二品の別について

初品明託法進修分、二入法界下明依人入証分。……祇園重閣摂化之始、普光法堂起行之初也。

というが、この「行」は当然一乗の別教の行を説くものとして標段しているものである。しかも、これら二品の経文の解釈についてはまた十解・十行・十廻向・十地等の行位を用いて論じているところである。この説はやはり一乗の同教の立場における論説であるというべきであろう。このことについてはまた『雑孔目』「四十五知識文中意」として

第一知識約二乗別教説見仏義。

第二知識約二乗別教観察大海得正縁起蓮華上仏説円教義。

等と説くが、しかもそれらは「十解法」の文内について等として説いているところである。これらの行の説について後の宗学は「次第行布門」の説とするが、智儼における一乗の同教の立場における説に始るものといわなければならない。

（龍谷大学講師）